

## 「早く収まって」

使用者委員 濱上剛一郎

新型コロナウイルス感染症の拡大とその影響はどこまで広がるのでしょうか。全国的に緊急事態宣言は解除され、改善の兆しはみえるものの、依然として警戒が必要な状況は続いています。

鹿児島では今の所、感染が確認された人は10人（5月26日現在）。全国的にみても少なく、クラスターも発生していない。自粛要請をきちんと守るまじめな県民性なのか、それとも水際対策がうまくいっているのかわかりません。中には「鹿児島県民は特産の焼酎やお茶をよく飲むから感染しないのだよ。」という人もいますが、いずれにしてもこのまま収束してくれることを祈るばかりです。

振り返ってみれば、今年の正月、オリンピック・パラリンピックの年を迎え、様々なイベントで盛り上がり、鹿児島では国体も開催される予定で、明るく、前向きに取り組んでいきましようとする年のあいさつを交わしたものでした。あれから5カ月、これほど世界の状況と我々の生活をとりまく環境が激変するとはだれが想像できたでしょうか。今回のことは、単なる経済危機と違って、命と健康に関わり、大人から子供まですべての世代に降りかかる難局であります。

児童・生徒にとっては、年度末、年度始めの大事な時期に、学校が休校になるなど大きな痛手となりました。特に、それぞれステージが変わった新入生は気の毒というほかありません。また企業も営業自粛や外出自粛のあおりを受けてヒト・モノ・カネの流れがストップし、甚大な影響を被っています。感染拡大防止の面からも経済雇用対策の面からも国や県などで様々な対策がとられています。それらの施策についていちいち論評はしませんが、有効に活用されることを祈るばかりです。

さて、今回のコロナの危機を契機に働き方や学び方など様々なことが変わりました。

企業ではテレワークやローテーション勤務、時差出勤など通常だとなかなか踏み切れなかったことに取り組んだところも多いようです。

テレワークは、移動時間が無くなった分、生産性が上がったという話も聞きますし、WEB会議もやってみると思っていたよりスムーズだったと前向きの評価が多いようです。最初は何もそこまで思っていたWEB飲み会も結構盛り上がるらしい。このほかテークアウトに挑戦したり、新たな商品やサービスの事業に取り組むなど、業種の幅を広げる企業もみられたようです。

余儀なくされた形ではありますが、働き方や経営のイノベーションにつながることを強く願います。

教育の世界では、学校でのオンライン授業への取り組みやデジタル機材の整

備なども進めばいいと思いますし、賛否はともかく 9 月入学の議論も始めてみればいいのかもかもしれません。

いずれにしてもこの難局を契機にデジタルの恩恵をこれまで以上に受けられる便利な社会が到来すればいいと思います。歴史を振り返った時にきっと今が時代の変り目で、ニューノーマル（新常态）時代の到来だったと思えるのかもかもしれません。

とはいえ、どんな時代になっても、やはりコミュニケーションの基本は「Face to face」だと思います。医療や介護、交通などテレワークでは代用できない仕事もあります。

その場の雰囲気や熱量は、直に接しないと感じられません。人と人は直接対することによって本当に分かり合えるのだと思います。人の隣には人がいるというのがやはり素敵なことだと思います。

マスクなしで多くの人と自由に会える日が一日でも早く来ますように。